

第1回 県立高校教育振興検討会議 議事概要

1 日 時 令和5年6月1日(木) 9:30~11:00

2 場 所 県防災危機管理センター 2階 中会議室

3 委員出席者 荒井 公浩 池永 美子 上田 良美 近藤 智久
品川 祐一郎 鈴木 真由美 高瀬 幸忠 田辺 恵子
鳥海 清司 中村 総一郎 松山 朋朗 水口 勝史
水口 芳美

4 会議の要旨

司会が開会を宣し、教育長が挨拶した。

教育長挨拶

(教育長)

本日、第1回県立高校教育振興検討会議を開催しましたところ、委員の皆様方には、大変お忙しい中、ご出席を賜りまして、誠にありがとうございます。

日頃から本県教育の発展のためにご尽力賜っておりますこと、この場をお借りしてお礼申し上げます。また、大変お忙しい中、この会議の委員をお引き受けいただきましたことにも厚く御礼を申し上げます。

さて、デジタル化やグローバル化など、社会が大きく変化していく中、また少子化も急速に進んでいく中で、県立高校がどうあればよいのかということについて検討するために、令和3年8月に「令和の魅力と活力ある県立高校のあり方検討委員会」を設置し、2年弱に渡りましてご議論をいただけてきました。この中では、生徒一人一人の様々な可能性を引き出して、未来を切り拓く生徒を育成していくにはどうすればよいか、グローバルに活躍する人、また地域産業を支える職業人として活躍する人、そういった様々な人を育成するためにどうすればよいかということについて、中長期的な展望に立って幅広い観点からご意見をいただけてきたところです。先日、報告書として取りまとめをさせていただきました。

この報告書では、後程説明もいたしますが、「魅力ある高校教育を通したウェルビーイングの向上 ～学びたい、学んでよかったと思える高校づくり～」を基本理念として掲げています。そして、例えば、「生徒の可能性を引き出し、自分らしく未来を切り拓いていくための確かな資質・能力と意欲の育成」といったことに始まる3つの目指す姿を掲げています。また、「地域・大学・企業や学校間の連携による取組みの推進」などの6つの方向性や具体的な方策もお示ししたところです。

富山県では、中学校卒業予定者数が今後も急速に減少していくことが予測される中、この報告書や総合教育会議で議論してきたことを踏まえ、魅力と活力ある県立高校づくりを進めていくことに向け、議論したいということです。高校教育の改革と高校再編の議論を一体として、引き続き丁寧に検討を進めたいということで、この県立高校教育振興検討会

議を設置させていただきました。具体的には、県立高校の再編に関する学校規模や基準、また学科コースの見直し、さらには様々なタイプの学校、学科などの基本的な方針などについてご議論をいただきたいと考えています。

この会議は今年度、5回程度開催したいと考えていますが、県立高校の現状を踏まえつつ、社会の変化、生徒、保護者のニーズも踏まえた学校づくり、そして、普通科や職業科などの今後のあり方等についても、いろいろな角度から丁寧に議論を進めていくことができれば幸いに存じます。

本日は第1回ということで、これまでの経緯や現状などをご説明の上、この会議の検討事項の確認と今後の進め方等について協議をいただきたいと考えていますが、どうか委員の皆様には忌憚のないご意見を多数賜りますようお願い申し上げまして、開会にあたってのご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

組織運営事項（会長の互選、副会長の指名）

司会から、議事に先立ち、県立高校教育振興検討会議設置要綱第5条第2項の規定により会長を互選していただく必要がある旨を説明し、委員に諮ったところ、品川委員を推挙する発言があり、全員異議なく、品川委員を会長に選出した。

品川会長の就任挨拶の後、同要綱第5条第4項の規定により、品川会長が鳥海委員を副会長に指名し、以後の議事については同要綱第5条第3項および第6条第1項の規定により、会長が進行した。

議事事項

○ これまでの経緯について

○ 本会議の検討項目および今後の進め方について

事務局から資料に基づき、本会議における検討事項の確認と検討に当たって参考とする事柄などについて説明した。

（会長）

これまでの経緯や本検討会議における検討項目の確認、今後の進め方ということで、事務局から説明がありましたが、これらへのご質問にあてていただいても結構ですので、委員の皆様方から一人ずつ自己紹介も兼ねてご発言をお願いします。

（委員）

この会議では、まず生徒にどのような力、すなわち、どのような知識、技能、能力をつけてもらいたいのか。これまでも委員会等で検討されている内容だとは思いますが、学習指導要領の改訂もあった中で、教育目的や教育目標について再度確認していければと思っています。

そして、その教育目的、教育目標を達成するための効果的な教育方法にはどんなものがあるのか。例えば、対面によるものや生徒同士のディスカッションによるもの、フィールドに出て実地体験をするもの、遠隔によるもの。それからどんな教材が効果的なのか。特

に、学校がインターネットに繋がるという環境の中で、様々な媒体を利用することもできるということを理解していかなければいけないと思っています。もちろん、これまでも様々な委員会の中でこのようなことが検討されているのですが、改めて確認をしていきたいと思っています。

特に、それぞれの教育方法や扱う教材に関しては、適正規模のクラスというものが存在するはずですので、その適正規模について検討できればと思います。生徒数の減少により、学校規模が縮小されていますが、逆に言うと、一人一人の生徒にこれまで以上に丁寧に接することができるような環境になり、きめ細やかな教育指導を可能な状況になると考えます。そこを生かした教育改革を行い、よりよい方法を構築していければと思います。

(委員)

今のご説明も普段から大変関心のある分野のことであり、様々な思いをもちながら聞いていました。

公私連絡会議に参加しているのですが、県立高校は県立高校のやるべきことがあり、その中で私立高校はどういう形で個性を発揮していくのかを考えるよい機会になっています。目の前にこれだけの少子化が迫ってくると、私立高校はいわゆる中小企業と同じで、生徒が集まらなければなかなか継続が難しいという状態です。とは言うものの、県立高校がこれ以上少なくなっていくと通いにくい生徒も出てくる可能性があると考えられるため、大変慎重にこの議論をしなければいけないとも感じています。

(委員)

中学校でも少子化の波は押し寄せており、富山市でも学校の統合再編が喫緊の課題だと思っています。

本校も、以前は5学級、6学級とあったのが、だんだん少なくなってきました、今では3学級です。3学級になったと同時に教員数も少なくなり、部活動の運営上も大変課題が多いと感じています。どんなに少なくとも4学級は必要ではないかということを実感、実態として感じています。

高校に中学生を送り出す側として、県内の魅力ある高校を中学生に伝えて、一人一人の個性をさらに伸ばしていけるようにいろいろなご意見を聞きながら、私自身も勉強させていただけたらと思っています。

(委員)

3年くらい前のキャリア教育が大変注目されていた際、小学6年生の担任と共にキャリア教育に力を入れて頑張ってみようかということで、民間の教科書会社の力も借りながら取り組んでみたことがあります。一人一人の児童が明確な未来像を描き、「僕はこういう職業に就きたい」ということを明らかにしており、そのためにはどういった学びが必要かということもしっかり理解していました。職業に対する理解といった面からも、小中学校におけるキャリア教育は本当に大切なことだと思いました。

また、小学校から中学校へ、中学校から高校へ、高校から大学へという進路がありますが、そこで自分の進路を実現できる受け皿というものがとても大切になってくると思うの

で、どういう学科が大切なのかといったことなどもこの会を通じて、お聞かせいただければと思っています。

(委員)

「令和の魅力と活力ある県立高校のあり方検討委員会」の中でも発言させていただいたこととして、地域には小学校、中学校、高等学校があり、私立、公立、県立を問わず子どもたちの学びの環境がそこにあるわけです。そうしたバランスを考えながら、また、この報告書には「高校生ファーストで考えるべきではないか」というようなご意見が記されていましたが、そういうことを念頭に置きながら、今後10年、20年先の富山県の教育がどうあればよいのかということ様々に皆さんとご議論できればと思っています。

例えば一つの要素として、通学にかかる時間があります。それぞれの目的をもって、かなりの時間をかけて通学している子どもたちがいる現実があります。一方、学校での学び以外でいろいろなことにチャレンジしたいので、通学時間は短くて済む近くにある学校で学びたいという理由で進路選択をしたという例もあります。

そういった様々な考えがあるので、今後私どもが議論を深めていく中で、事務局には大変かと思いますが、議論の流れに沿って参考となる資料もご提供いただきながら、今後のあり方について皆さんと一緒に考えていければと思っています。

(委員)

ぜひ多様な生徒への対応や生徒一人一人の人格を育てるという点からも、生徒のニーズが一番大切だと思いますので、アンケートといったような生の声、もちろんそれ以外の声も重要だと思いますが、これまでたくさんのアンケートをとって分析をしているので、生徒が何を求めているのかという観点から、多くの情報を使って検討ができればと思っています。

高校のあり方を考えるにあたり、生徒によっては保育園、小学校、中学校、高校と進み、その後に大学に進む方もいれば、就職される方もいることから、例えば小学校や中学校との連携や、進路を考える時に、私立高校と県立高校をどのように見て判断していくかということも視点としてあるのではないかと思います。

少し話は変わるかもしれませんが、いろいろなやり方がある中で、教育の方法として、身に付けるためには自分が教えられるようにならないといけないという話がよくあります。例えば、小学生や中学生に高校生が教えるというような連携や、大学と連携し、大学生と高校生が交流する中で、大学生が高校生に講義をすることで、大学生が自分の学びを深めていくといったような双方が「Win-Win」になるような教育方法も探っていけるとよいと思っています。

(委員)

物事を決めていくにあたり、我々委員ももちろん大切な要素ですが、生徒やそれに関わるステークホルダーの方々への様々なアンケートが非常に重要なデータだと思っています。今回いろいろなアンケートを示していただいているのですが、私はこのアンケートには関わっていなかったもので、どのような設問だったのかということも教えていただきたいと思いま

す。

それから、せっかくの機会ですので、もしまたアンケートを取る機会があれば、実際に高校を卒業して社会人になった後や大学に進学した後を振り返ってみるとこうだったというような意見もぜひ収集してデータ化すべきだと思うので、ぜひご検討いただければと思います。

(委員)

2015年に初めてできたオタヤ子ども食堂での経験について、お話しさせていただきます。来ている子どもたちは幼児が多いのですが、その中で、私立高校の生徒がフロアサービスや調理をして食事を提供してくださっています。

幼児の子どもたちはお母さんと来るのですが、多分、家庭ではいろいろな経験をしたことはないと思われます。それが子ども食堂に来て、自分と同じくらいの年頃の子どもが、食べ終わった食器を返しに行くといった姿を見て、学習していく光景があります。教えるということは必要だと思いますが、見て経験するということが大変重要なことなのだろうと思います。

同窓会のお世話をしていた母校の高校が再編統合されたり、母校の小学校が小中一貫校になったりした経験を踏まえて考えると、子どもが少ないというのは非常に大変なことだと思っております。子どもたちの育つ環境というのは、保護者の皆さん、特に母親の力が大きいと私は思っており、お母さん方にいい情報、正しい情報が届けられるといいと願っています。

(委員)

私の息子のことですが、高1の時に「自分で起業したいと思うんだけど、文系と理系のどちらを選べばいい？」と聞かれて、答えられなかったことがあります。

それぞれの高校の役目についてですが、現在、学校によってインターネットもあれば、オンライン学習サービスのようなものもあります。学校で先生方が知識を教えてくださいが一番なのですが、それ以外で一人一人の生徒の人生デザインや部活動の経験、留学の経験といったような各校の特色・魅力というところをどのようにそれぞれの県立高校で作上げていくかということが、選ばれる学校ということにおいて、おそらくキーになるのだろうと思っています。

理念の中の1番は、魅力ある高校教育、ウェルビーイングです。6つの方向性の中の1番目には、各学校の特色や魅力をさらに深化させるということが記載されています。今回の私たちの役目は、学校規模の基準や再編、学科コースの見直しではありますが、先ほどの委員からもあったように県立高校のあり方をいつも念頭に置き、サイズの議論ばかりではなく、それぞれの学校の質というか個性といったことも考えながら検討していく方がいいのかなと感じています。平均的にダウンサイズしていくだけでは、子どもたちの幸せの総量も減るので、何を知っているかではなく、何ができる子どもたちを育てたいのか、そこが肝心だと思います。そのようにそれぞれの高校の魅力が高まり、子どもたちの幸せの総量が膨らむような再編であればいいと感じました。

(委員)

昨年度の会議の中にもありましたが、学びの多様化ということにも一つポイントがあると思っています。これが望ましい学科編成というところに繋がっていくわけですが、地域・企業などがどう協力できるかという言葉も、報告書の方向性の中に入っています。

ある高校の生徒が高校の所在している地域でフィールドワークをしたということが、先日の新聞に掲載されました。地域が高校生に対して何ができるかという視点で、社会問題や地域問題について子どもたちに気づきを与え、解決策を一緒に対話しようということで、そういった企画をさせていただいています。

子どもが減り学校が大変な状況になっていくという中で、地域・企業をどうサポートできるかというところを考える時間もあるといいと思っています。

中卒予定者数の推移を見ると、私が高校生だったころが一番ピークの時期になっていますので、自分の経験が必ずしも、現在に適用できるものではないと思っており、皆様とよりよい学校環境を構築できるように一緒に考えていけたらと思っています。

(委員)

私は、産業界の中でも特に富山県が強いとする製造業に携わっているのですが、毎年、富山県の高校生が当社に10名前後、電気、機械といった分野を中心に入社いただいています。大学生もそうなのですが、高校生の方が、会社に入り日々成長していくというか、入社した頃は子どものような顔つきだったのが、いつの間にか本当の親父のような顔つきになっていき、だんだん逞しくなっていく状況があります。職業を通して人が成長することをまざまざと見て、経験しているので、そういう立場からお話ができればと思っています。

この前も新聞で報道されましたが、高校生の就職率が富山県は100%を誇っています。これは全国一位で、今年初めてというわけではなく、ずっと上位を占めているのです。この辺について、富山県の産業界と高校の関係が非常に密接に繋がっている伝統なのではないのかと思っていますので、富山県が富山県であるためにも、この伝統はしっかり背負っていかなければいけないと感じています。

もう一つ気になることは、富山県の大きな課題として女性の流出が最近盛んに指摘されていますが、その辺の問題と高校再編の問題等を重ねて考えていく必要があるのではないかと感じています。

しばらく子どもの教育現場から離れているというか、そういう経験が薄くなっているのか、高校生の意識が今どの辺にあるのか。おそらく想像するに、デジタル化が進んでいるので、私が子どもだった頃よりも情報がたくさん溢れており、職業観も我々が抱いていたものよりも、もっと詳細というか細かいところまでイメージをしているのではないかと思います。そういう意識をどのように高校に反映させていくかというところが課題なのではないのかと思います。

昨年まで進められた「令和の魅力と活力ある県立高校のあり方に関する報告書」を拝見させていただきましたが、大変立派なことが書かれています。この報告書に書かれている危機意識からすると、これからビジョンばかり話をしていても時間がないのではないかと率直に感じます。いかに行動を起こしていくのか、今はそういう段階に来ているのではないかと感じています。

(委員)

私は、子どもたちがすでに大人になっているので、高校の現場というものを本当に理解していない状況にあります。孫が小学生なのですが、その孫がどういう学生生活を送って欲しいかということを考えてみました。自分の夢に向かって力強く、たくましく成長していける学生生活、そして社会に出てからコミュニケーションを上手にとっていけるように学生生活を通して養っていけるような教育をしていただけたら、親としてはありがたいと感じています。

今回の会議で、皆さんからいろいろなご意見をお伺いし、1から勉強し直すつもりでいます。

(会長)

ありがとうございました。

私の方からですが、先程の委員からアンケートの結果が載っていますが、こういった形で、前回の「令和の魅力と活力ある県立高校のあり方検討委員会」で取得したのかをご説明いただけるとありがたいです。

(事務局)

今回は「令和の魅力と活力ある県立高校のあり方に関する報告書」をお示ししていますが、アンケート結果等を記した別冊があります。次の機会等にご紹介させていただければと思っています。

(会長)

前回の「令和の魅力と活力ある県立高校のあり方検討委員会」でも、生徒、学校、地域の三方よしを図っていくことが大切ではないかということをお申し上げました。先程も生徒ファーストという言葉も出ていました。一方で、先生方の働き方改革や予算の出所等を考えると、運営側の視点も必要であろうと思います。

また、先程も話が出ていましたが、地域の存在としての高校という視点もあります。残念ながらすべてに対してトップレベルの対応ということは、少子化や厳しい財政状況、地域バランスといったものを考えると難しい中で、どうバランスを取っていくか、三方よしとなるかと思っています。逆の見方をすると、三方一両損ではありませんが、生徒の皆さんには通学時間がかかるがある程度我慢していただき、学校の先生方にもニーズが増える中での運営をお願いし、地域の皆さんにとっては各地域に学校があることは望ましいのですが、再編統合が必要となった場合にはご理解をいただかなければならない、というような視点も今回の議論では大事だと思っています。

そういったことをしっかりと議論し、検討を重ねた上で、三方一両損かもしれませんが、ご理解をいただきながら、説明をしっかりとしながら、進めていくということが今後の少子高齢化や少子化に伴う学校再編ということに必要なのかなと思いました。

もう1点、先程の委員からもありましたが、数合わせではなく、その高校のあり方や各学校の特色、スクール・ポリシー、職業教育を含めた役割、位置付け、意味付けといったことをしっかりと踏まえた上で、適正なあり方や規模の両方を幅広い視点から、深く洞察

していく必要があるのではないかと思います。

さらに資料2の6ページにある報告書の一番骨子の部分ですが、生徒自身の資質・能力と意欲の育成、主体的に課題を発見し、解決する課題解決力の育成、他者へのリスペクトや多様な価値観を認め合うこと、つまりダイバーシティ&インクルージョンということが今後の目指す姿であると書かれていますが、全く同感というか素晴らしい目指す姿が打ち出されたと思っています。ここに沿った形で進めていく、すべての基本として取り組む必要があると感じています。

補足意見やこの際にご発言されたいことがありましたら、お願いします。

(教育長)

補足なのですが、先程の委員から高校を卒業した後の生徒の意見なども聞いてはどうかというご指摘がありました。本日の概要版だとそこまで明らかにわからないのですが、卒業生にもアンケートを実施しています。またご提供したいと思いますが、県内全日制高校を過去2年間に卒業した生徒を抽出し、アンケートを取っています。標本数388に対して有効回答数189という規模ですが、実施した結果があるので、なるべく早めにご提供したいと思いますので、お願いします。

(会長)

ありがとうございました。

先日、知事が挨拶される会合に出席しました。そこで、知事が仰っていたように女性の県外流出対策を県として重点的に取り組む中で、高校生の段階で富山に魅力的な就職先がたくさんあるということは何らかの形で伝える機会や視点も必要ではないかと思います。

私から2点質問があります。今後、再編の基準や基本的な方針を議論するというのですが、具体的な高校名を第2回、第3回の中では考えずに、まずは基準について議論するという認識でよろしいでしょうか。

あと、今回は県立高校の教育振興検討会議ということですが、私立高校との役割分担やバランスというご意見も複数の委員の方から出ています。私立高校との関わりについてどこまで踏み込むことを考えているのか現時点で伺えることがあれば、お伺いしたいと思います。

(教育長)

富山県で特に女性の流出が進んでいることについて、高校教育でできることはないかというお話がありました。これについては、高校でも「17歳の挑戦」という事業をやっており、その中で県内企業のバスツアーを実施しています。普通科高校などの生徒も県内のいろいろな分野の企業を訪問させていただき、そこでの活動について現場を見学させていただきながら、体感し学ぶということを令和元年から始めています。コロナの影響でできなかった年もありますが、これは効果があるのではないかと思います。実施の前後に行っているアンケートに、「将来、富山県内の企業に就職することを自分の選択肢に入れているか」といった質問があるのですが、実施後は選択肢に入っていると回答する割合が高くなっているという結果となっていました。非常によい学びの場になっているのではないかと

と思っており、今後も継続しながら、さらに実施方法も工夫していきたいと思っています。

また、望ましい規模などを検討するにあたり高校名が実際に出るのかどうかということについては、高校の現状についての情報を提供していくことになると思います。ただ、再編統合に関して具体的な高校名をこの会議で挙げることは、考えていません。途中段階で、例えば、それぞれの高校の実態や場合によっては課題のようなことを協議する必要が出てきた場合には、具体名を出すということもあり得るかもしれません。この会議は原則すべて公開とさせていただいていますが、扱う中身により、場合によっては一部公開せずに実施ということもあり得るのではないかと思います。要綱上もこの会議での決定により、公開しないことができるとさせていただいています。

私立学校との関わりについてですが、県立高校について検討する場合には、一方で私立学校があるわけなので、私立学校の設置状況や生徒数といったことを情報提供することはあるかと思います。私立の状況も踏まえて、県立にはどういった学科が必要なのかといったことや私立学校とは別の魅力といったことを検討するのに参考となるようなものはご提供できればと思っています。

(会長)

大変クリアになりました。ありがとうございます。

その他、ご意見等ございますでしょうか。

(委員)

仕事をする関係上、コロナは非常に大きな要素でした。学校もそうだったと思うのですが、コロナ禍で得たものの一つにオンライン授業があると思います。せっかく得たのだから学校を越えて利用するといったことの検討などもできればよいのではと思います。これまでも検討されていると思うのですが、高校生の方々に大きなインパクトがあるといえば部活動だと思うので、例えば、文化系サークルであれば、小さい部はなかなか単独の学校では難しい側面もあるでしょうから、学校を超えて2、3校で一つの部をつくるというようなことの具体的な検討が進んでいるのか聞いてみたいと思います。

(会長)

県教育委員会からも部活動応援企業の募集をいただいております、私どもも検討させていただいています。また、部活動の地域移行ということも業界全体の大きな課題になっているかと思います。今の件についてはいかがでしょうか。

(委員)

部活動に限定しなくてもいいのですが、学校を超えて授業を共有するということはまだ難しいのではないかと思いますので部活動について伺いました。

(事務局)

今ほどの件ですが、コロナ時にオンライン授業を自宅でするという期間がありました。その時期も契機になったわけですが、オンラインを利用して教科の授業などで、他の高校、

県内或いは県外の生徒とともに交流して勉強するというようなことは、以前よりも増えました。さらに言うと、海外の生徒との交流はこれまでは直接現地に行くといった形でしたが、オンラインで現地の生徒と交流をする、或いは現地の専門家の方に講師になっていただき講演をしていただくということも以前より増えています。

部活動での交流は、運動部では合同で大会に出るというようなことはあるのですが、活動自体をオンラインを利用して行っているかということは、把握していない状況です。

(会長)

アンケートでも部活動の環境整備に、高校再編統合がプラスに働いたというご意見が、保護者の方、先生方からも出ていたかと思います。高校の部活動のあり方も、この高校再編のあり方に関わってくるのではないかというご意見だったかと思います。

(委員)

これからご説明があるのかもしれませんが、今回は高校の再編、学校規模や基準などの基本的な方針について議論し、また学科やコースの見直しにも入っていくと思っています。学校規模や基準、おそらく4学級から6学級になるのだと思いますが、県立高校に当てはめればこういうことになり、そうした資料が出てくるのではないかと思っています。私の希望としては、魅力的で特色ある県立高校を形成している他県の例で、学級規模にかかわらず、距離は少し離れているとか、3学級の学校であるとか、そうした学校で個性的な教育が行われているといった他府県の成功例や失敗例みたいなものがあれば、議論に幅ができるのかなと思います、リクエストしたいと思います。

また、学科やコースの見直しについても、そういうサンプルがあれば、知識が少ないものですから、そういう例をいただければありがたいと思いました。

(会長)

今回の資料の中にも石川県や他県の普職比率の表などがありました。また、他県の中高一貫校の資料などもありましたが、そういったものも織り交ぜながら、提案資料のご準備をよろしくお願いいたします。

議事が終了したので、委員長が終了を宣し、進行を事務局へ戻した。

5 閉会

11時00分、司会が閉会を宣した。